

〈夕顔〉の世語りと菩提心

金沢大学人間社会研究域教授

西村 聡

なにがしの院ではかなく消えた夕顔は後の世の語りぐさ（世語り）となった。たまたまなにがしの院付近を通りかかり、女（前ジテ）の歌を詠ずる声を聞いて夢の世界に引き込まれた僧（ワキ）も、豊後の国から出た縁で玉葛の母親を弔う気になり、その前に名に負う場所での世語りを女に期待している。女は夕顔の巻の言葉を組み合わせて、光源氏との出会いから死に至る経過を要約し（4段サシ・クセ）、中入りと僧による弔いをはさんで、当夜のなにがしの院の気疎い状況を現出させている（8段掛ケ合）。後者は女（後ジテ）が僧にここを「見給へ」といい（詞章の引用は金剛流行謡本による）、僧も目に見える池や松の様子を言葉にして、夕顔の巻による叙景に加わっている。前場の要約と後場の叙景を合わせて、「世語りを。かけて現は」すことが行われたと理解される（要約と叙景の語は新潮日本古典集成『謡曲集下』による）。

その間、前場と後場を「かけて」、僧の夢は続くと思られる。中入り前に前ジテは夕顔の死に語り及び、そのことを「夢に來りて申す」と結ぶのは後場の予告ではない。また後ジテは物の怪に取り殺された有様を「今の夢人」が現すといいつつ（7段サシ）、後場で現すのは気疎い状況に過ぎない。先刻、宵の間に仕事をした前ジテまで含めて「今の夢人」と

自称するのであり、前ジテが《化身》、後ジテはその《正体》という、夢幻能一般の区別は当てはめにくい。僧自身は仮寝の夢を見ているつもりはないにしても、そういえば五条あたりのあばら屋界隈を歩き回るうちに、女の歌を吟ずる声を聞くと思う頃には（小書「山之端出」がつくと、前ジテは僧の着キゼリフの前にも幕内で歌を吟ずる）、そこは六条河原の院（なにがしの院と化していた。そして後ジテが後場で現す主意は、執心ゆえの「かゝる身」（8段掛ケ合）から解脱（10段ノリ地）を遂げるところに認められる。それは過去の再現ではなく、新たな事態の進行といふべきであろう。

僧の所望した夕顔が露と消えた世語りは、こうして4段の要約と8段の叙景を「かけて現は」されたが、菩提心を勧める『源氏物語』の真義（4段クリ）を大切に語り伝えた女は、いたずらに恐怖心や無念を強調するより、「この世は斯くばかり儂かりける蜉蝣の」を始め、夕顔の露の命のはかなさを印象づける要約にしている。「源氏は皆無常也。：花のことくなる人も皆夢のことくなりけるといふ事を沙汰せるを、此物かたりの所詮とする也。」（『源氏物語提要』夕顔）という『源氏物語』観に通ずる境地に、女も今は到達しているかに見え、それゆえにこそ解脱もかなうのであるが、早世したため生前は菩提心を起こすに至らなかつた。

捨てられない執心は後の世の障りとなり、今もなお心を覆う浮き雲が去来する（2段サシ・下ゲ歌・上ゲ歌）。その身の上を「かゝる身」というにしても、女は《死の物語》を抱えながら恋慕の妄執にやつれるわけではなく、かといって《半部》の夕顔のように光源氏と出会った思い出（《生の物語》）に陶醉するのでもない。（夕顔）の女は夕顔の花の色香を捨てないままの美しい姿で現れ、捨てられなかったことを悔いると共に、夕顔の巻の「あはれ」（4段サシ）を説いて、自他に菩提心を勧める役割を果たし、僧に老少不定（遍昭の哀傷歌を踏まえる）の世語りを受け止められている。

なながしの院で散り果てた夕顔の花は二度と咲くことはないと思われた（4段クセ）。しかし、僧の巾いを受けて喜ぶ女は夕顔の花が開くようにほほ笑み、願いのままに「東雲の道」の迷い（なながしの院に到着した光源氏が夕顔に詠みかけた歌の言葉。その返歌が前ジテの吟ずる「山の端」の歌）を抜け出した（10段ノリ地）。僧の巾いは法華説誦（そくじゆ）の声を絶やさないと（6段上ゲ歌）、加えて女に仏教的な世語りを促し、菩提心を勧める語り手に同化させる働きをしたことも見逃せない。さらに、女自身が序之舞（9段）を舞う前に、「優婆塞が行ふ道をしるべにて来ん世も深き契り絶えずな」という、光源氏（せうげん）が夕顔の宿で詠んだ歌を吟じて、「かゝる身」となっても来世に希望を託す姿勢を明確にしたことにも意味があらう。

光源氏の歌の真意は弥勒の世を来世として、この世のみならぬ契りを頼みとさせることにあった。『源氏物語』では

長生殿の古例が不吉に思われて、そう言い換えたときれているが、光源氏の望むところは比翼連理の誓い（つまりは現世的欲望）と変わらないから、結果も古例に同じく二人の仲は引き裂かれてしまう。その歌を今、女が復唱するのは（喜多流では僧も上の句の詠唱に加わる）、ただ往時を偲ぶためではない。もちろん、光源氏その人に執着する気配もない。優婆塞の勤行ならぬ僧の巾いを得た今、女はそれを道しるべに來世往生を遂げる覚悟を、歌と舞で確かめるつもりであろう（小書「合掌留」では、舞い上げた後、僧に向かつて合掌する）。序之舞を舞う前後で状況が変化していると見て、序之舞自体が成仏への変身の過程であるともいわれるが（三宅晶子「変身する舞―（夕顔）と（巻絹）―」『鍊仙』四九八、二〇〇一年二月）、その過程には右に述べてきたような、また世阿弥のねらう貴女惱亂の風趣（『三三』）とも異なる、菩提心の発露が随所にうかがわれる。興味本位に流れがちな世語りとは一線を画した作りを、実際の舞台でもたどり返してみたいと思う。